

ボランティア活動に関する学生の意識と動向

—ある大学での調査と認識構造の解析—

迫 明 仁
上 地 雄一郎
*山 本 力

キーワード：ボランティア活動，質問紙調査，認識構造の解析，重回帰分析

1. 問題の所在

1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災（平成7年度兵庫県南部地震）では，死者6,308人，負傷者約4万1,500人，家屋全壊50万棟の被害がでた（朝日新聞，1995年12月31日）。これに対し，国内外から被災地を訪れた災害救援ボランティアの数は，1995年末日までで延べ130万人を上回り，なかでも若者を中心とした未経験者が大多数だったと推定されている。ボランティア活動の内容も，当初の医療・食料などの緊急援助，ライフラインの復旧などから，1996年には日常生活の援助，「こころのケア」，都市再建の支援などへと移行してきて，現在も多数の個人や団体が様々な面でボランティア活動を展開している。

災害救助のボランティア活動（NGO・NPO活動を含む）だけでなく，近年は企業・団体等の社会貢献，わが国・国民の国際貢献のあり方が話題となり，それらの活動も活発化しつつある。これに呼応して，ボランティア活動を積極的に支援・展開するためのシステムや方策も検討され（厚生省，1993；中央社会福祉審議会，1993；ほか），専門ボランティアの設置，ボランティア組織のネットワーク化，ボランティア活動休暇制度などが実現されつつある。大学によっては，学生のボランティア精神を培い活動を支援するために，授業科目（ないし単位認定）として位置づけたり，専任のコーディネータを配置するところもみられるようになった。

著者らの所属する大学（4年制大学および短期大学）では，保健福祉系の学部・学科に所属する学生が全学生の過半数を占めている。そのため，学生のボランティア活動は比較的活発に行われているが，ボランティア活動自体を教授・学習の主題とする独立した授業科目の設置はなされていない。また先の阪神淡路大震災では，学生・教職員の有志がボランティア活動に参加しているが，大学としてボランティア活動を支援する制度や組織が正規に準備されているわけではない。

大学として，学生のボランティア活動をどのように支援し，また教育課程の一環として位置づ

* 岡山県立大学保健福祉学部

けるべきか否か、仮に授業科目を開設するあるいは単位認定を行うとしたらどのようにそれを進めればよいかなどの問題については、学部・学科および全学の議論を待たねばならない。しかし、ボランティア活動の本来の趣旨からして、主体者であるべき学生の意識やニーズを無視してそれらの議論を進めることはできない。

本研究は、この視点から、大学生のボランティア活動の実状と意識を検索したものである。大学によっては学部構成やいわゆる校風が異なり、また学生のボランティア活動に関してもそれぞれに伝統や組織、活動内容に違いがある。今回はそれらを考慮した検索を行ったわけではない。あくまでも先の議論のための資料の一部とすることを目的とし、著者らの所属する大学における学生のボランティア活動の実状（ボランティア活動の動向とその背景にある認識の構造）を探るものである。

2. 計画および方法

学生のボランティア活動の実状と意識を探るために、質問紙調査を実施した。仮に全学を対象とする「ボランティア活動に関する授業」を設置するとすれば、一般教育科目のひとつとして開講するのが概ね妥当と考えられるので、調査の対象は全学部・学科の1・2年生を基本とし、一部福祉系の3年次生を含む構成とした。

調査は著者らが担当する授業の一部の時間に実施された。学生に調査への協力依頼と趣旨説明を行ったうえで、協力者に質問紙を配付し無記名による回答を求めた。実施時期は1996年1月であった。

487人の学生から回答を得ることができたが、授業受講者の構成上の問題から、1学科（管理栄養士養成課程）のみ例数が11と少なかったのが今回の分析からは割愛し、分析の対象は7課程（学部または学科・専攻の単位）476例とした。分析対象者の課程、学年、男女構成の内訳を表1に示す。

表1. 回答者の課程別内訳（人）

所属・養成課程	(略称)	学年	男	女	計	
大 学	社会福祉士	(福祉)	1, 2, 3	11	91	102
	看護婦・保健婦	(看護)	1, 2	0	42	42
	デザイナー	(美術)	1, 2	14	61	75
	情報工学技術者	(工学)	1	44	8	52
短期大学	保 母	(保母)	1, 2	0	73	73
	介護福祉士	(介護)	1, 2	1	75	76
	体育教員・指導員	(体育)	1, 2	6	50	56
			計	76	400	476

質問紙は、著者らが例年行っている「学生生活に関する意識調査（授業に対する関心度や生活内容などに関する調査）」を含む二部構成になっている。「ボランティア活動に関する調査」は9項目（下位項目を含めると12項目）から構成される。

ボランティア活動の定義や活動内容については、個人により理解が異なることも多いと考えられるので、ボランティア活動を社会福祉の領域に限らず、幅広い分野で行われる「自主的、公益的、無償的」活動として捕らえるよう、具体的な活動内容を例示した資料（総理府や社会福祉協議会の調査などでよく用いられている活動内容の一覧；別表）を添付して注意を喚起した。

なお、質問紙の具体的な内容および単純集計の概要については、山本ほか（1996）の報告を参照していただきたい。

3. 結果および考察

3-1. 基本的な意識と活動の実態

はじめに、ボランティア活動に関する基本的な意識と活動状況を確認しておきたい。基本的な意識および活動の状況としては、「A. 活動意思（ボランティア活動への今後の参加・実践の意思）」、「B. 興味・関心（ボランティア活動への興味・関心）」、「C. 参加・実践（大学入学後のボランティア活動の有無、活動頻度）」、「D. 組織加入（ボランティア活動を主な目的としているグループ・組織への所属または登録）」の4項目についての回答をみていくことにする。

実際の回答は3段階ないし4段階の評価（選択肢）からなるが、表2は各項目の回答をそれぞれ低水準（0）と高水準（1）に2分してロス集計した結果である（所属課程別、百分率）。表の最右列はA～Dの各水準をその順に4桁の数字でパタンとして表したもので、そのうちの代表的な6つのパタンを掲げている。

併せて、項目単位での単純集計についても掲載している（それぞれ1すなわち高水準の割合のみ）。また、入学前のボランティア活動の有無も掲げている。しかし、入学前の活動の具体的な時期や内容、形態などの詳細は調査していないので、今回は参考資料に留めている。この点は、昨今、小中学校・高校で福祉教育やボランティア活動の振興が重視されており、学生のボランティア活動の動向との関連で今後の改めて詳細に検討する必要があるだろう。

なお、課程別の群（列方向）の配置は、クロス集計のデータもとにクラスタ分析（ユークリッド距離・ウォード法）を行った結果を参考に並び換えを行っている。

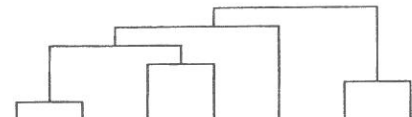
まず、単純集計の結果から全体を概観する。ボランティア活動に積極的な興味・関心を持った（B）、実際に活動している（C）という者の割合は、対象学生の過半数を若干上回る程度であるが、今後ボランティア活動を「行いたい（続けたい）」という（A）学生は80%に達している。また対象学生のうち、25%はボランティア活動に積極的な組織に加入または登録している（D）。しかし、入学前の活動経験（62%）に比べると入学後の活動（53%）は若干減少しており、特に非保健福祉系の課程の学生でその減少は著しい。

この様相を課程別にみると、大きくは保健福祉系（福祉、保育、介護、体育、看護）と非保健福祉系（美術、工学）に分かれるが、保健福祉系の5群間の様相は必ずしも一様ではない。例えば、体育（体育教員・レクリエーション指導者養成課程）群は、「活動意思」と「参加・実践」の面では他の保健福祉系の4群と同じく高い割合となっているが、「興味・関心」の面では非保健福祉系の2群と同等の水準に止まっている。また、「組織加入」率の面では、介護（介護福祉士養成課程）群は福祉（社会福祉士養成課程）群や保育（保育士養成課程）群の半分にも達していない。

このような相違をさらに詳しく比較するために、次にクロス集計の結果に目を向けることにす

表 2. ボランティア活動に関する意識・活動の状況 (%)

課程別群のクラスタ構造例



A	B	C	D	福祉	保育	介護	体育	看護	美術	工学	全体	状況
活動意思	興味・関心	参加・実践	組織加入	N=102	73	76	56	42	75	52	476 (実数)	パターン
0 (Low)	0 (Low)	0 (Low)	0 (Low)	1	11	7	5	0	40	42	14.5 (69)	0000
			1 (High)	0	0	0	0	0	1	2	0.4 (2)	
		1 (High)	0	1	4	1	9	0	1	0	2.3 (11)	
			1	2	0	1	0	2	0	4	1.3 (6)	
	1 (High)	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0.6 (3)	
			1	0	0	0	0	0	0	0	0.0 (0)	
		1	0	0	0	1	0	0	0	2	0.4 (2)	
			1	1	0	1	2	0	0	0	0.6 (3)	
1 (High)	0	0	0	4	5	18	21	10	24	25	14.5 (69)	1000
			1	1	1	1	0	0	0	2	0.8 (4)	
		1	0	9	4	9	29	7	3	0	8.4 (40)	1010
			1	3	11	0	2	2	0	2	2.9 (14)	
	1	0	0	12	8	16	4	36	17	15	14.3 (68)	1100
			1	3	1	1	0	2	1	2	1.7 (8)	
		1	0	25	18	33	27	21	8	0	19.5 (93)	1110
			1	39	36	9	2	19	3	0	17.6 (84)	1111
単純集計	A (1)			95	85	88	84	98	56	46	79.8 (380)	
	B (1)			79	63	62	34	79	31	23	54.8 (261)	
	C (1)			79	73	57	70	52	15	8	53.2 (253)	
	D (1)			79	73	57	70	52	15	8	25.4 (121)	
入学前の活動 (1)				59	66	70	75	74	47	48	61.8 (294)	

注1) クロス集計：各課程で10%以上の値は太字で示す

注2) 単純集計：全体値以上は太字で示す

る。表2のクロス集計のようすから、福祉群と保育群が、また美術（デザイナー養成課程）群と工学（情報工学技術者養成課程）群が、それぞれ極めて似通った分布を示していることがわかる。ちなみに、クロス集計部分のみの値による福祉群と保育群の積率相関係数は.92で、美術群と工学群は.97である。

前者の2群は意識および活動状況の4項目とも高水準である（1111の回答パターン）者の割合が共に40%近くに達し、それぞれの群での主流的存在になっているのに対し、後者の2群は4項目とも低水準（0000の回答パターン）の者が共に40%を占めており、ボランティア活動に関する意識や活動状況が、前者の2群と後者の2群とはまったく逆の傾向にあることが明確に現れている。

福祉群と保育群では、「興味・関心、活動意思とも高く、ボランティア組織に所属し活動を行っている」という状況パターン1111に次いで多いのが1110のパターンに属する者である。すなわち、ボランティア活動を主な目的としているグループ・組織へ所属または登録はしていないが、関心、意欲、活動経験とも高水準の者である。両パターンの者を合わせると、福祉群が64%、保育群が54

%とそれぞれ過半数を超えており、他の課程の学生に比べて意識、活動とも高いが、1110より1111のパタンの割合が多いことから、両群では組織による活動がボランティア活動推進の基盤になっていることがわかる。詳細は後で述べるが、とりわけ保育群では、ボランティア活動の動機のうち「団体活動の一環」をあげたものが53%と過半数に達し、課程別4群のなかでも最も多いことから（表4参照）、活動のきっかけとしても組織・団体行動のウエイトが高くなっている。

福祉群と保育群でみられた「組織加入」とボランティア活動の関係は、体育群では様相が一変する。体育群のボランティア活動経験者の割合は福祉群や保育群とほぼ同水準の70%となっているが、ボランティア組織への加入・登録している者はわずか5%で、7群のなかでは最も低い群のひとつとなっている。さらに、体育群は「興味・関心」と活動経験との関係でも、先の2群とは大きく異なっている。福祉群と保育群は「興味・関心」の高い者の割合が70%前後であるのに対し、体育群はその半分ほどの34%である。ちなみに、「興味・関心」がある者の数に対する活動経験者数の割合（C/B）は福祉群が1.0、保育群が1.2であるのに対し、体育群は2.1と7群のなかでは最も高い値を示す。つまり、体育群は「興味・関心」度と「組織加入」率は相対的に低いにもかかわらず、ボランティア活動には積極的に参加しており、その傾向は入学前からもあるようである。

この体育群のボランティア活動に関する意識や活動の状況は、体育群の専門性と固有のかかわりがありそうである。これも詳細は後述するが、体育群は「人に勧められて（33%）」「団体活動（この場合の団体は、所属する課程や体育会系サークルを指しているとみられる）の一環（28%）」として、スポーツ・レクリエーションに関するボランティア活動（71%）に参加しているという図式がみえてくる（表4および5参照）。

体育群の状態像に比較的近いのが介護（介護福祉士養成課程）群である。状況パタン1000には体育群、介護群とも約20%の学生が集まり、また1110のパタンは両群とも約30%となっており、ところが共通している。異なるところは、先ほど述べた体育群の特色をまさに代表する意識・活動状況ともいえる1010のパタンが29%と他の群に比べて多いのに対し、介護群では他と同様10%未満となっている部分である。単純集計の結果からみても、介護群は「興味・関心」の意識の面では体育群を上回っているものの、ボランティア活動の実践面では体育群より幾分か消極的であることがわかる。

次に看護（看護婦・保健婦養成課程）群であるが、表2の上部に掲げたデンドログラムにおける看護群の配置は、クラスタ分析の手法によっては介護群を含むクラスタと直接に融合することがある。ちなみに、看護群のクロス集計の分布状況を他の群と比較する（相関係数でみる）と、介護群との相関係数は.74、福祉群とは.70となっており（他の群との相関係数は.57以下）、看護群の成績は介護群と福祉群の両方の分布上の特徴を備えた中間的な様相を示している。

看護群は、介護群と同様、ボランティア活動に関心を寄せている者の割合が比較的多いにもかかわらず、実際の活動の割合がそれほど増えていない。状況パタンでは1100が36%と、他の群が

何れも20%以下であることに比べて多いことがそれを示している。一方、「興味・関心」と「活動意思」の面では福祉群とまったく変わらず、また「組織加入」者が介護群より多い点は福祉群に近い状況が認められるのである。なお、看護群の構成は1年次生が9割近くを占めていることを考慮すれば、関心や意欲、「組織加入」のようすからみて、学年進行により活動経験者が増加する可能性はあるのではなかろうかと考えられる。

ところで本節の冒頭でも触れた美術群と工学群であるが、両群では0000の状況パタンの者が40%を占めそれぞれ主流的存在となっており、またボランティア活動経験者もそれぞれ15%、8%と他の5群の50%以上という値に比べて極端に少ない。この背景にはボランティア活動に対する関心や意欲の違いだけではなく、後に述べる認識（考え方や活動をしない理由）の違いもある。しかし、両群とも関心はないがボランティア活動に参加したい意欲を持っている者（1000）が25%、関心・意欲ともある（1100）者が約15%で、また単純集計でも約半数の者（56%と46%）は将来の活動の可能性まで否定しているわけではない。諸条件が整えば、両群とも介護群や看護群の活動状況に近いレベル、あるいは入学前の活動経験に近いレベルまでの活動率の上昇は望めるかもしれない。

3-2. 分析のための群の再構成

同一課程内ですべての学生が同じ意識や活動状況にある訳ではない。例えば、体育群はボランティア活動に関する基本的な意識や活動の状況が大きくは3つの状況パタンの系統（1000, 1010, 1110）に分かれているように、他の群でも3ないし4系統の代表的な状況パターンに分散する傾向がある。また、ボランティア活動は、本来、個人の意識に根ざしたものであり、学生の所属（課程）とは直接に関係のない部分もあるはずである。

このような理由により、以後の検討においては、課程の枠を越えて基本的な意識や活動の状況が同じ者を群として抽出して、これらの群についても課程別と同様に検討したい。具体的には、表2に示した状況パターン別の例数が35例以上の6系統をここでは「状況別群」として分析の対象に追加することとする。この6パターンに全対象476例中の423例が含まれ、その割合は89%である。

また、調査事項は回答の内容によって進むべき設問が異なるため、課程別に集計した場合、設問ごとに該当者が異なり例数が極端に少なくなることがある。データの信頼性の消失を避けるため、設問ごとの例数が35例を下回る課程別群はその設問の検討の対象から割愛することにした。ただし、一部の設問においては、回答傾向を確認した上で課程別群の統合を図ったところや回答が不備な者を除いた箇所もある。また、状況別群も設問によっては該当者なしとなる部分がある。以下の検討のための対象群とその構成員数をまとめたものを表3に示す。

3-3. ボランティア活動の動機と活動内容

大学入学後ボランティア活動をしたことのある学生の動機（Q1）と活動内容（Q2）を集約したものが表4および表5である（それぞれ複数回答の結果である。なお、活動内容の詳細は別表を参照していただきたい）。課程別に集計した4群と状況別の3群、および群構成に漏れた者

表 3. 設問別の分析対象群とその構成員数 (人)

設問	条件	課程別の分析対象							状況別の分析対象						全体
		福祉	保育	介護	体育	美術	看護	工学	1111	1110	1010	1100	1000	0000	
Q1	C(1)	81	53	43	39	—	—	—	84	93	40	—	—	—	253
Q2	C(1)	81	53	42	38	—	—	—	84	92	39	—	—	—	251
Q3	C(0)	[21, 20]		[33, 17]		64	—	48	—	—	—	68	69	68	223
Q4	—	102	73	76	56	75	42	52	84	93	40	68	69	69	476

注1) []はブールし統合する群を、また—は N<25で分析対象外を示す

も含む全体（当然、該当者のみ）の回答を項目ごとに掲げている。項目の配置は回答率の高い方から降順に並べてある。

また、同表には、項目ごとに群間の回答の変動をみるための検定 (χ^2 検定) と、3 - 1 で述べた基本的な意識や活動状況の 4 項目 (A, B, C, D) との関連をみるための重回帰分析の結果も同時に掲載している。 χ^2 検定の結果については有意水準のみを回答項目の欄に付し、重回帰分析の結果はステップワイズ方式で採択された説明変数(偏回帰係数が負の場合は小文字で表す)とその偏回帰係数の有意水準および決定係数を掲げている。ただし、重回帰分析に用いる説明変数の値には本来の回答の 3 段階ないし 4 段階評価の値(群ごとの平均値)を使用し、変数選択の基準 (Fin, Fout の基準) には F 分布の 5 % 点を用いた。さらに表の下部には、各群の回答の分布状況を標示する平均値、歪度、尖度も掲げている。なお重回帰分析においては、標本としての群の数が 7 群しかなく十分な標本数を満たしていない。この点は慮して考察を進めたい。

さて、ボランティア活動の動機(表 4)であるが、全体として最も多かったのは「08活動内容や対象などに興味・関心があった」で過半数の 56% を占め、次いで多いのが「01社会勉強として体験してみたかった」の 43% となっている。これらは、「11社会や人々のために有益なこと(社会貢献)だから」(22%) や「06やむにやまれぬ気持ちから」(5%) などのどちらかという公益的・献身的な思いではなく、むしろ自らの興味や勉強のためといった趣が強い動機である。しかし、これら以外の動機や活動の内容にも目を向けると、課程や意識・活動状況の違いによって、それぞれの様相に独自のものがみえてくる。

保育群の活動動機の 1 位は「08活動への興味」で、その割合は 85% と同群内の他の動機や他の群と比べ抜きん出て高い値を示している。「04サークルや団体、学校行事などの活動の一環だった」(53%) や「12自分の専門分野の勉学や就職活動に有利になると考えた」(38%) がこれに続く。一方、活動内容の面(表 5)では、同群の 55% は「16地域活動(子供会の援助など)」に参加した経験を有している。これは同群の他の活動内容や他の群に比べてと非常に高い割合となっている。また「01相談・交流(あそび相手など)」(40%) や「06スポーツ・レクリエーション」(28%)、 「13慰問・上演」(23%) などの活動内容が上位にあがっている。これらを総合すると、主として対象(児童とみられる)とのかかわりがある活動内容に強い興味を持ち、ある

表4. Q1-ボランティア活動の動機(複数回答: %)

回 答 項 目	福祉	保育	介護	体育	1111	1110	1010	全体	回帰構造	R ²
08 活動への興味**	53	85	63	26	74	56	30	56	C*	.612
01 社会勉強として	53	36	49	31	48	51	33	43	B*	.694
04 団体活動の一環**	32	53	23	28	48	15	18	32	a*, D**	.960
10 人間性を豊かに**	37	30	26	15	44	33	10	30	A*	.972
12 勉学・就職のため**	27	38	21	8	39	19	3	24	C**	.863
11 社会貢献として	21	17	23	23	15	27	35	22	d*	.745
02 人に勧められて*	17	17	26	33	12	29	33	21	c**	.972
09 交流を求めて	27	21	16	15	29	19	10	19	A**	.837
05 ゆとりがあった	15	17	7	10	14	15	8	13		
07 人として当然	2	8	7	13	7	10	13	9		
13 何となく	5	4	7	13	5	4	18	8	b**	.843
03 やり甲斐がある	5	9	14	0	10	9	3	7		
06 やむにやまれず	7	4	2	3	6	6	3	5	A*	.653
平均	23	26	22	17	27	23	16	22		
歪度	0.6	1.6	1.4	0.1	0.8	1.0	0.4	1.0		
尖度	-0.6	2.7	1.7	-1.1	-0.1	0.3	-1.4	0.6		

注1) 太字は[上位四分位数]以上、斜体は[平均+2SD]以上の値を示す(群内)

 注2) R² 決定係数, * $p < .05$, ** $p < .01$, 小文字は負の係数を示す

表5. Q2-ボランティア活動の内容(複数回答: %)

回 答 項 目	福祉	保育	介護	体育	1111	1110	1010	全体	回帰構造	R ²
06 スポーツ・レク**	38	28	43	71	43	34	44	39		
01 相談・交流**	51	40	43	13	52	35	21	37	A*	.764
10 募金活動	37	34	31	47	44	30	36	37		
14 献身活動	33	21	24	18	31	32	23	29		
02 家事・身辺介助**	43	21	26	5	45	22	10	27	A**	.891
16 地域活動**	11	55	24	8	36	17	3	23		
03 食事サービス**	35	2	12	3	33	9	3	16	A**	.776
09 収集活動	14	8	17	26	13	20	10	15		
12 労力提供	17	11	12	8	14	12	13	13	C**	.878
13 慰問・上演**	15	23	5	3	19	7	5	12	A**, d*	.943
04 外出介助	19	2	12	18	17	11	8	12		
17 環境美化・整備**	17	2	10	8	15	3	8	10		
07 手話・点訳**	14	4	0	3	14	4	0	7	A**	.797
11 教育・学習	2	2	0	5	1	4	3	2		
05 医療・保健	4	0	2	3	4	1	3	2		
08 製作・貸出*	0	8	0	0	4	1	0	2		
15 国際交流・援助	1	2	5	0	2	2	0	2		
18 文化伝承・保存	0	0	2	0	0	1	0	0		
平均	19	14	15	13	22	14	10	16		
歪度	0.5	1.2	0.8	2.3	0.4	0.7	1.6	0.6		
尖度	-1.0	0.7	-0.3	5.1	-1.2	-1.1	2.0	-1.0		

注1) 太字は[上位四分位数]以上、斜体は[平均+2SD]以上の値を示す(群内)

 注2) R² 決定係数, * $p < .05$, ** $p < .01$, 小文字は負の係数を示す

いは活動を通してその対象との接触を求めて活動を行っているようすが浮かんでくる。

活動内容やその対象に対する「興味・関心」がボランティア活動の大きな動機となっている点は介護群も同じである。しかし、介護群では1位となっている「08活動への興味」も保育群よりは20ポイントほど低い63%である。逆に「01社会勉強として」や「02周囲の人に勧められた（頼まれた）から」は、保育群よりも若干増えている。また、表1の単純集計にみられるように「活動意思」と「興味・関心」は両群がほぼ同じ水準にありながら、介護群は保育群よりボランティア活動「参加・実践」の割合が15ポイントほど少なくなっている点も考えに含めると、保育群に比べて介護群のボランティア活動に対する態度は幾分か消極的であるといえよう。

福祉群の特徴は、主に「01社会勉強として」や「08活動への興味」の動機から（ともに53%）、比較的多くの活動分野に積極的にかかわっていることであろう。活動の割合で比較すると、福祉群では回答率が30%以上の活動内容が6項目あるのに対し、他の課程別群は2項目ないし3項目しかない。その6項目の内訳は、「01相談・交流」「02家事・身辺介助」「03食事サービス」「06スポーツ・レクリエーション」「10募金活動」「14献身活動」であるが、他に「07手話・点訳」や「17環境美化・整備」なども10%台ながらも他の群よりは活動の割合は多い。なお、これらの活動のうちの「02家事・身辺介助」や「07手話・点訳」は、授業科目として同様の内容が設定されている介護群よりも多く（逆に介護群の活動が少ないともいえる）、福祉群ではボランティア活動を通して福祉の現状や技術などを学ぼうとする姿勢が窺われる。

福祉群とは反対に、活動のレパートリーが狭く一部の活動に特定化し、また「01社会勉強として」や「08活動への興味」の動機がそれほど強くない一方で、「02人に勧められて」は他の課程別群より多いという特徴を現しているのが体育群である。これはすでに述べたことではあるが、体育群は「02人に勧められて」「04団体活動の一環」（ボランティア組織への加入率は5%しかない）、所属する課程や体育会系サークルを指しているとみられる）として、「06スポーツ・レクリエーション」や「10募金活動」にかかわっているようすがみえてくる。

ところで、ボランティア活動の動機および内容と基本的な意識・活動状況との関連であるが、 χ^2 検定において群間の有意差が認められながら、重回帰分析において有意な説明変数が採択されない場合がある。この場合は、課程の違いが群間の変動要因になっている可能性が考えられる。

そのような結果が現れているのは、活動内容の方だけで4項目ある。具体的には「06スポーツ・レクリエーション」で体育群のかかわり度が高く、「08製作・貸出」と「16地域活動」では保育群、「17環境美化・整備」では福祉群のかかわりがそれぞれ大きい傾向がある。活動内容からして、体育群と保育群では課程（専門分野）との関連が高くてもおかしく部分である。

次いで他の活動内容をみると、重回帰分析で採択された説明変数（意識・活動状況）の大部分は「活動意思(A)」となっている。「01相談・交流」「02家事・身辺介助」「03食事サービス」「07手話・点訳」「13慰問・上演」の5項目で、「活動意思」が採択されている。これらの活動の経験がある者は、今後もボランティア活動を行いたい（続けたい）という意味が比較的強いこ

とを示していると考えられる。なお、「10募金活動」と「14献身活動（献血など）」は、活動経験としては比較的多く全体では3位と4位にあるが、課程間の差や意識・活動状況との関連は検出されていない。この2つの活動内容は、ボランティア活動としての認識のもとで行われているのではなく、誰にでもできうる貢献的な行為だからであろう。

次に動機についてであるが、活動内容の面では「活動意思」と関連性が高い項目が多く、また課程（専門分野）の独自性もみられたのに対し、動機の面では関連性の高い意識・活動状況は多岐にわたるものの課程単独の変動は検出されていない。「活動意思（A, a）」との関連も4項目みられるが、他の意識・活動状況も「興味・関心（B, b）」が2項目、「参加・実践（C, c）」が3項目、「組織加入（D, d）」が2項目検出されている。しかも、正の相関（大文字）だけではなく、負の相関（小文字）もそれぞれにある。

「活動意思」と正の相関があるのは「10自分の人間性を豊かにできそうだ」や「09人や社会・自然との新たな出会いや交流を求めて」などで、「興味・関心」との正の相関は「01社会勉強として」があがっている。これらの動機は、「ボランティア活動推進7カ年プラン構想」（全国社会福祉協議会、1993）がヤング層（15～35歳）のボランティアライフ・ニーズとして取り上げている「仲間をつくりたい」「生き方を考えてみたい」「広く世界を知りたい」と奇しくもオーバーラップしている。しかし、ここでの分析の対象はほとんどを保健福祉系の学生が占めているためであろうが、実際の「参加・実践」は「08活動への興味」や「12勉学・就職のため」といった動機に支えられていることが読みとれる。

一方、介護群や体育群、1110群や1010群で回答率が高くなる傾向のある「02人に勧められて」では「参加・実践」との負の相関が、また「11社会貢献として」では「組織加入」との負の相関がみられる。人に勧められての（自主性の高くない）活動は活発とはいえず、また「組織加入」率が低い群の活動には、社会に貢献するためという動機が台頭しがちであることを示している。

3-4. ボランティア活動を行っていない理由

次に、大学入学後ボランティア活動をしていない学生に対して質問した「活動していない理由（Q3）」について検討する。表6は複数回答で得られた理由を全体の割合の高い方から順に並べたものである。先の表4や表5と同様に基礎統計と回帰構造の要約も掲げてある。ただし、当然ながら重回帰分析の説明変数から「参加・実践」は除いている。

ボランティア活動に参加していない最大の理由は、「06自分の生活や時間にゆとりがない」で、どの群でも半数を越えている。これは同様の過去の諸調査でもほぼ1位にあげられており、最も一般的な理由となっている。この項目については、本調査の対象群の範囲では「興味・関心」との正の相関関係が検出されており、活動に興味や関心はあるがゆとりがなく参加できていないという思いが窺われる。ただし、美術群でのこの理由の割合は59%で他の群とほとんど変わらないものの、歪度と尖度のようすから群内では突出している。著者らが例年行っている学生生活調査（山本ほか、1994、1995）によれば、美術群の「生活の中心になっていること」の1位は

表 6. Q 3 - ボランティア活動に参加していない理由 (複数回答: %)

回 答 項 目	福保	介体	美術	工学	1100	1000	0000	全体	回帰構造	R ²
06 ゆとりがない	61	56	59	53	62	54	56	57	B*	.634
08 活動に不案内	39	36	28	38	37	39	32	35		
05 機会がない**	37	36	17	36	34	39	13	30	A*	.605
11 何となく*	32	30	19	11	35	33	22	24		
01 指導者がいない	20	16	16	30	21	28	10	20		
03 同志がいない	20	18	14	17	13	25	13	17		
04 自信がない	15	18	11	13	13	14	15	14		
09 関心がない**	0	2	20	28	0	1	35	12	a**	.924
07 負担感がある	7	10	11	9	1	6	18	9	a**	.799
02 独善的に思える	5	4	6	13	4	6	9	6		
10 否定的な気持ち	0	0	2	6	0	1	4	2	a*	.575
平均	21	21	18	23	20	22	21	20		
歪度	0.8	0.7	2.1	0.8	0.9	0.3	1.4	1.3		
尖度	0.2	0.1	5.5	-0.3	0.2	-1.1	1.9	2.0		

注1) 太字は[上位四分位数]以上、斜体は[平均 + 2SD]以上の値を示す (群内)

注2) R² 決定係数, * $p < .05$, ** $p < .01$, 小文字は負の係数を示す

「授業関係」で、約80%の学生がこれを掲げ、他のことがらも含めて他の課程の学生と比較しても抜きん出て多い（他の課程の学生では「友人とのつきあい」や「サークル活動」などが1位にあげられているが、それも最高は40%台である）。このような背景を考えれば、美術群で「06ゆとりがない」のウエイトが非常に高いことの察しはつく。しかし、他の群でも（個人それぞれに）ゆとりを作りにくい何らかの理由はあるものと思われ、むしろ「興味・関心」が高いほどこの理由を選ぶ者の割合は高くなる傾向が回帰分析からみられる。

次いで多いは「08何をすればよいのかわからない（活動に不案内）」で、各群とも30%前後の者が理由として掲げている。ボランティア活動に今後参加しようという意思を持つ1100群や1000群では40%近くに達している。表2で示したように、入学前の活動経験がない学生が40%近くいることともあわせて考えれば、まだボランティア活動についての理解が十分でない学生の存在が予想できる。また、「01身近に適当な指導者や助言者がいない」や「03身の回りに同好の仲間がいない」もそれぞれ20%程度ある。これらの理由は、後で述べる「09活動に興味・関心がなく、必要を感じない」や「07責任や人間関係、経費などに負担を感じる」などの理由に較べれば、ボランティア活動に対する拒否感は薄い方だとみられる。さらに「活動意思」のある群では、「05自分がしたい活動やその機会がなかった」という者も増える傾向がある。学生たちの最も身近な場である大学でボランティア活動に関する情報や機会の提供が積極的に行われ、また指導・助言ができれば、このような思いを抱いている学生の活動は促進されるのではなからうか。

一方では、ボランティア活動に対して拒否的な理由もないわけではなく、群によっては30%台にも達している。「09関心がない」が0000群や工学群、美術群では30%前後あり、上位2位から4位に位置するほど大きなウエイトを占めている。この項目は「活動意思」と負の相関関係にあ

り、割合としては僅かではあるが、「07負担感がある」や「10活動に対して否定的な気持ちがある」でも同様の傾向がみられる。しかし、このような思いは単なる感覚的な否定ではなく、(関連は後に述べるが)その背景の一部には「行政的な対応の充実」を求める認識も作用しているようである。

3-5. ボランティア活動に関する考え方

最後に、学生がボランティア活動に関してどのような考え方を持っているのか検討してみたい。調査対象全員に対し、ボランティア活動に関する考え方(Q4)で賛成できる項目を選択してもらった結果が表7である。課程別の7群と態度別の6群の回答を項目ごとに掲げている。項目の配置は全体の回答率の高い方から降順に並べてある。

ここでまず注目したいのは重回帰分析の結果である。これまでみてきたようにボランティア活動の動機(Q1)や活動内容(Q2)および活動していない理由(Q3)に関しては、基本的姿勢のうち「活動意思」がかかわっていることが多かった。しかし、決定係数は幾分低くなっているが、ここで採択された有意な説明変数は8項目のうち6項目までが「興味・関心」で占められている。とりわけ、「09大きな力を発揮できるようにボランティア団体のネットワーク化が必要である」や「02専門ボランティア(コーディネータなど)を増やす必要がある」、「07大学の授業として『ボランティア活動』や『社会貢献』に関するものがあってよい」は1%水準の有意性が示されている。このようすから、ボランティア活動に対する「興味・関心」は、単なる一般的な関心というよりも、より組織的・専門的な活動や体制の必要性を認識とした考え方を内在していることが示唆される。しかし、回答パターン0000群でもそれらの項目には約20%から30%が同意している。本調査の実施時期が阪神淡路大震災発生のはぼ1年後にあたり、当時、マスコミ等

表7. Q4-ボランティア活動に関する考え方(複数回答:%)

回 答 項 目	福祉	保育	介護	体育	看護	美術	工学	1111	1110	1100	1010	1000	0000	全体	回帰構造	R ²
04 支援体制の整備**	69	59	55	46	76	57	69	65	74	71	45	62	46	61	B*	.437
06 国民意識の低迷	40	55	53	57	52	59	46	44	56	56	55	52	42	51		
09 ネットワーク化**	59	40	45	39	71	41	40	52	65	53	38	43	35	48	B**	.604
05 幼少期に経験	38	47	49	46	57	35	33	43	48	54	43	42	29	43	A**	.507
10 企業貢献の増加	34	34	49	29	48	43	33	40	43	44	33	36	32	38	B*	.343
02 専門家の拡充**	44	33	39	29	43	29	33	48	52	28	33	28	30	36	B**	.529
07 授業として設置*	39	27	34	25	38	21	35	35	34	49	28	28	22	32	B**	.489
01 有償でもよい	27	23	29	30	24	20	33	31	28	21	28	20	26	27		
03 活動の社会評価	19	11	16	20	24	9	21	19	22	21	13	14	7	16	B*	.375
08 行政的対応が先**	11	7	17	16	14	21	31	5	12	15	15	22	29	16	a**, c*	.852
平均	38	34	39	34	45	34	37	38	43	41	33	35	30	37		
歪度	0.2	-0.1	-0.6	0.5	0.1	0.3	1.8	-0.6	-0.1	-0.1	0.0	0.5	-0.6	0.0		
尖度	0.1	-0.8	-1.0	-0.7	-0.9	-0.9	4.4	0.7	-0.7	-1.3	-0.3	-0.6	1.6	-0.6		

注1) 太字は[上位四分位数]以上、斜体は[平均+2SD]以上の値を示す(群内)

注2) R² 決定係数, * $p < .05$, ** $p < .01$, 小文字は負の係数を示す

でボランティア活動を巡るさまざまな話題が取り上げられていた影響があったかもしれない。

「興味・関心」以外の説明変数が検出された他の2項目ではいずれも「活動意思」が現れている。ただし、相関としては正と負に分かれている。「08ボランティア活動に頼るより『行政的対応の充実』が先である」は「興味・関心」と負の相関関係があり、また「参加・実践」も同時に負の関与しており、決定係数としてはかなり高い値を示している。「興味・関心」がなく実際に活動していない者は「行政的な対応の充実」を望んでいる、あるいは頼ろうとする傾向があることが示唆される。「活動意思」が採択されたもうひとつの項目は「05小中学校で積極的にボランティア活動を体験させた方がよい」で、こちらは正の相関関係である。

また、本研究の目的から特に「07授業として設置」に注目すると興味深い点が見えてくる。そのひとつは、関心、意欲、活動とも低い水準にある0000群でも、2割から3割の者はこの項目を選択しているという点である。これに同意することが、その種の授業を受講したいという意思を表しているわけではないが、ボランティア活動や社会貢献に関する知識や技術あるいは実践方法などを学ぶことの意義については理解を示していると解釈できるのではなかろうか。

2点目は1001群の回答率が13群のなかで最も高いという点である。1001群は関心や意欲はあるものの、まだ活動に参加していない者の集まりである。1001群の回答率は、関心や意欲は同じ水準にあり、すでに活動経験がある1111群や1011群のそれより15ポイントほど上回っている（ただし、 χ^2 検定での有意差はない）。ボランティア活動に関する授業があれば、そこで新たに学びたいという思いがあるのかもしれない。

参 考 文 献

厚生省：「国民の社会福祉に関する活動への参加の促進を図るための措置に関する基本的な指針（厚生省告示第117号）」，1993.

中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会：「ボランティア活動の中長期的な振興方策について（意見具申）」，1993.

山本 力，迫 明仁，上地 雄一郎：岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部学生の生活と意識に関する調査，岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部平成5年度特別研究報告書，1994.

山本 力，迫 明仁，上地 雄一郎：学生の生活と意識に関する調査（2）－学生相談を中心に－，岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部平成6年度特別研究報告書，1995.

山本 力，迫 明仁，上地 雄一郎：学生の生活と意識に関する調査（3）－ボランティア活動を中心に－，岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部平成7年度特別研究報告書（全学版），13－17，1996.

全国社会福祉協議会：ボランティア活動推進7カ年プラン構想，1993.

別表. ボランティア活動の内容

-
- | | |
|------------|------------------------------------------|
| 01 相談・交流 | 相談・助言、話し相手、遊び相手、文通、情報提供（パソコン通信）、など |
| 02 家事・身辺介助 | 清掃・洗濯、炊事、買い物、入浴や食事の介助、着替えや整容の介助、保育、など |
| 03 食事サービス | 給食・弁当の献立・調理や配食、会食の催し、など |
| 04 外出介助 | 外出ヘルパー、車椅子介助、自動車の運転・送迎、用事の代行、など |
| 05 医療・保健 | 栄養改善、健康管理、医療活動、リハビリ訓練、など |
| 06 スポーツ・レク | スポーツ・レクの指導・介助、旅行・キャンプの手伝い、など |
| 07 手話・点訳 | 手話通訳、朗読・代読、点字・点訳、要約筆記、など |
| 08 製作・貸出 | 介護用品製作・修理、絵本作り、裁縫・手工芸品作り、本・器具の貸出、など |
| 09 収集活動 | 切手・ベルマーク等の回収、文具・図書・古着などの収集・提供、など |
| 10 募金活動 | 募金活動、募金への寄付、ユネスコ活動、チャリティ活動、物資提供、など |
| 11 教育・学習 | 学習（勉強）や趣味（生花・音楽等）の指導、専門知識・技術の指導・援助、など |
| 12 労力提供 | 荷役・運搬作業、耕作・除草、清掃、行事・企画の手伝い、など |
| 13 慰問・上演 | 講話・演芸・演奏・舞踊などの上演・招待、プレゼント提供、など |
| 14 献身活動 | 災害救助、献血・骨髓提供、献体・臓器提供（登録）、など |
| 15 国際交流・援助 | 通訳、宿舍提供、外国人の相談・援助、海外協力援助、など |
| 16 地域活動 | 子供会・老人会の援助、老人・障害者宅の訪問、防犯・防災活動、地域活性化運動、など |
| 17 環境美化・整備 | 緑化運動、地域清掃、福祉環境の点検・整備、公害監視、自然環境・動物保護、など |
| 18 文化伝承・保存 | 伝統文化や芸能の伝承・記録、文化財の保存、観光・史跡ガイド、など |
-

（平成8年10月31日受付）
（平成8年12月25日受理）